

日本 26 聖人殉教者の祝日の説教

金 大烈 神父 2010 年 2 月 5 日 (金)

《無駄にしてはいけない殉教者の血》

おはようございます

日本では今日、2月5日は26聖人殉教者のお祝い日ですが、そのために犠牲になっているお祝い日があります。他の国では、2月5日は聖アガタおとめ殉教者の祝い日です。ですから、日本では明日になってしまいますね。「アガタの霊名を頂いている方が、こちらにも2人いらっしゃいます。おめでとうございます。」

私は隣の国(韓国)に居ましたので、日本の歴史を母国語でも、日本語でも、また他の言語でも接する機会が多くありました。詳しいとは言えませんが、日本の歴史について大体解かっています。日本に来て直接日本人と関わって、日本に暮らしながら、自分が間違っって考えていたこともあったし、これは素晴らしいと思ったこともあるし、悲しくてもどかしいところもあったと、率直な自分の感想です。

私は向こうに居て司牧していた時には、今日のような祝い日、例えば自分の国の記念日とか、民族的な祝い日には、必ず質問する内容があります。「私達の国は、又民族は、罪が多いのでしょうか。少ないのでしょうか。」と問います。ほとんどの人の顔に戸惑いが見られます。けれども結論として、「うちの民族はものすごい罪を犯している民族です。」とはっきり言います。どの国も、世界の全ての国の歴史を振り返れば、殺し合いの歴史です。自分の民族、自分の家族、兄弟姉妹、自分が立ち上がるために、殺しを行って来たのが実際に人類の歴史です。日本も同じでしょう。日本の歴史を振り返ると、本当に平安な時代と言える時がいつあったのでしょうか。考えて見たら、それは今の時代ぐらいでしょう。ある程度富を、そして、経済的な力を得られた充満な時代は今ではないでしょうか。民主主義になって、一般の民が、自分を表現が出来るようになったのは、まだ最近のことだと言っていると思います。軍国主義、戦国時代、その前は領主の時代、少数の人間以外は、ほとんど犠牲されていた国です。ですから、結構痛みのある、本当に癒されなければならない痛みのある歴史を持っている民族だと思います。ほとんどの国が同じような事情を持っていると思いますが、日本も例外では無く、その痛みの中で今まで来たと思います。

カトリック教会の姿を考えて見ても、本当に悲しい歴史を持っています。政治的な権力に巻き込まれて、政治家の言うことに従わなければならない時代もありました。反発して迫害された時もあったし、逃げるしかない時代もありました。今の時代、ようやくカトリック信者であることを公に表明出来る時代になったわけです。それ以前は会社でも、宗教的な話はできませんでした。そして、友がどんな信仰もっているかも分かりません。ただ、神社でなかったら、仏教でなかったら他の何かでしょうと、関心さえ持たない雰囲気が最近まであったのではないですか。

26人の聖人が血を出して死にました。その時代は今よりもっと厳しく、信仰に対して迫害が大きい時代です。その中で、聖三木パウロのような素晴らしい姿を見せて、信仰を守った人々もいます。結局どの国でもカトリック教会が本当に強くたくましく、綺麗に立ち上がるためには、殉教者の血の流しが必要だったことを歴史が語っています。殉教者を持っている国は、信仰的なあふれを感じます。色々な国を見てもその子孫たちが、殉教者のその血によって信仰的に強くなった気がします。【絶対に私達が無駄にしてはいけないもの、それは殉教者の血だと思います。】教会で一番大きい柱の中のひとつは、殉教者の精神だと思います。殉教者の霊性を私達が軽んじてしまうと、その教会の柱は崩れます。今日のような日を迎えて、いつも私達が意識しなければならない事は、やっぱり殉教者の血を思い出し、私達が今どんな気持ちで、心で、信仰生活をしているかと振り返ってみななければならない事です。

司教様との話で申し上げたことですが、私達が隠れキリシタンと自然に使いますがそれは間違いです。殉教者という表現をするべきです。そして、私達の先祖です。隠れキリシタンではありません。カトリックの立場で隠れキリシタンと言え、今でもカトリックにひとつにならなくて、自分勝手にあちこちと昔式でカトリックでないのにカトリックの姿を守っている人々を、隠れキリシタンと言え、るかも知れませんが。隠れキリシタンという言葉は、迫害する立場から使われた言葉です。どの国でも迫害があれば逃げます。信仰を守るために逃げます。そして、捕まってしまうと殉教します。たまには自ら「私はカトリック信者です。」と名乗って叫びながら、殺された人々もいたのです。大体は、迫害が始まったら、信仰を守るために何処も見つからないような所に行きます。それを何故日本だけ、隠れキリシタンと言うのでしょうか。信仰を守ろうと頑張ってきた人々で、私達の信仰の先祖です。ですから、私達はこれから、隠れキリシタンという言葉に反感を持っていいのではないかと思います。

一昨年、邑楽バテレン山の殉教者達の遺跡を訪ねる旅を行って来ました。今、本格的に司教様から許可を頂いて、東ブロックの教会、私達の教会が中心になって、桐生、伊勢崎、大間々、館林と一緒にさいたま教区設立75周年を迎える事業として動きます。何回も準備のために行動していますが、神様の導きを強く感じられます。本当に不思議だと思いが待っています。私達のことを明らかに示してほしい、世に現してほしいという先祖の気を感じます。ひとつだけ申し上げます。バテレンという言葉聞いたことがあると思います。私の推測ですが、ラテン語で神父のことを「パテル(Pater)」と言います。そのバテレンという言葉は、何人かの司祭がいたようですので、パテルの意味がバテレンと日本語的な発音になって、今に残されているのではないかと考えています。後で専門家によって明らかにされるとおもいます。バテレンの森、そこには司祭がいてミサも捧げられていたし、信仰の生活があった証拠も、全部残されています。バテレンの森の近くには、光善寺というお寺の後が残っています。それぞれのお寺等については、少なからず文献でその歴史の史料が残されていますが、この光善寺については、市町村に何の歴史的な後が残されていないのです。そして、このお寺の周辺に住んでいた人々は皆、焼き殺されたのだそうです。光善寺の前に仏像があるのですが、そ

れは 100%カトリック的な形をしています。

自分なりにこれらの事柄を推し量って見ますと、司祭達が森の中で、そこを教会としてミサを捧げ説教を行い、信仰の生活をしたのでしょう。そして、光善寺というお寺が仏陀の慈しみを強調しながら、逃げてきた人々を受け入れて来たのでしょう。段々とそのお寺の周りが、カトリック信者の村になったのだと思います。それが何かによって分かってしまい、全村民が、焼き殺されることになってしまったのだと思います。

韓国の場合は山奥に入って陶器を作りました。それを村に持って行って売りながら、カトリックの信者同士で、何か印をお互いに持って、1 ヶ月後この村に司祭が訪れるから、準備しなさいとかを分かち合ってきたのです。皆、このように隠れながら信仰を伝えて来たわけです。

このように信仰を生きて来た証があちこちであると思います。ただそれを活かせなかったことは、今の時代の私達信者の責任です。そう思います。私は個人的に色々な事柄をみて、神様が日本の国を愛されているのを感じています。皆様に質問します。皆様日本を愛していますか。本当に日本人であることを愛していますか。この心が大事です。

正しい愛がなかったら、私達は道から外れます。正しい愛があれば、この国のために何をするのが一番いいかはっきり分かります。今の時代、右に傾いている人、左に傾いている人がいますがそれは病者です。間違えた愛国心です。それは正しいことではありません。ある意味では、カトリック信者が一番望ましく国を愛する力を持っています。

26 人聖人殉教者や、私達のちかくにいる他の殉教者にも関心を持ってこの国のために、この民族のために、忘れずに祈らなければならないと思います。

私達がちゃんと綺麗な生き方をすれば、他の国も正しい生き方をします。今日、お互いにこのような感覚で、自分の国を愛さなければならないことを考えてみました。

皆様、必ずこの国を愛さなければなりません。自分の家族、自分の先祖、全ての人々が骨を埋めた所です。何があってもこの国のために、一番いいものが何であるか強く考えなければなりません。そして、もし私達の先祖に罪があれば、償いをしなければならないという意識も必要です。どの国でも悔い改めなければならないと思います。このような気持ちで信者として正しい態度を保ちながら信仰の生活致しましょう。

ありがとうございました。